

初夏の一行詩

小林守城

俯して地に耻ぢず
仰いで天に愧づることなし *

その造化において 無心に見なければ
見たことにはならないだろう
言葉の文化史は 淋しい認知症の森だ
言語野の向こうには
きつと只今に浸るだけの
行為する直観がある筈だ
だから今もお
無心が後ろ髪を引くときに
詩は瞬間に響き 走り去る影なのだ

六月の百花繚乱
競いあうことに関与せず
それぞれの存在の必然に生きて
花は季節に舞い明滅する
虫や蝶や光や風のほかには
美しく知らんぷりしているから
人は放たれていて淋しいから
どこまでも言葉で追いかけるしかないのだ

たばこ二本やがてさびしき牡丹かな
紫陽花をめぐりて恋の終わりとす
野の極み座して藍男体は夏の陣
筑波嶺をアルファに切りかえず泥燕
ヒバリなきやんのうのう自我眠る
薔薇咲きて雨一年の庭終わる
この白い道たそがれて一行の詩に至る

* マルクス経済学者・河上肇の詩
「生死は自然に任せむ」より